頬粘膜部硬化性血管腫の1例

井上靖彦・神谷博昭・神野卓三
横井基夫・原正勝

A case of sclerosing hemangioma in the buccal region

Yasuhiko INOUE・Hiroaki KAMIYA・Takuzo ZINNO
Motoo YOKOI・Masakatu HARA

緒言

血管腫は、真性腫瘍というよりも、むしろ發育奇形、あるいは過誤腫性疾患と考えられている。最近著者らは、結合組織間質が増殖をきたし、硝子質様の観を呈する組織型¹⁾に属する硬化性血管腫の1例を経験したので、その概要を報告する。

症例

患者：■■■■ 26歳 女性。

初診：昭和54年8月■■日。

主訴：左側頬粘膜部の腫瘍。

既往歴および家族歴：特記事項なし。

現病歴：昭和54年1月■■日に第1子出産後、2～3日して左側頬粘膜部に米粒大の腫瘍が発生、その後3か月間に約20×20 mm 大に増大し、同年8月該部の疼痛を自覚したので当科を受診した。なお患者は以前より頬粘膜を咬む癖があった。

現症：体格中等度、栄養状態良好、口腔内所見では欠損歯、う歯なく咬合状態正常で、腫瘍は左側第1大臼歯部頬側相当部の頬粘膜にあり、約20×20 mm 大の球状有茎性、表面は滑沢で乳白色、弾性軟で可動性かつ境界は明瞭であった(写真1)。

臨床検査所見：特に異常なし。

臨床診断：頬粘膜ポリープ。

処置および経過：昭和54年9月■■日局所麻酔下にて腫瘍の全摘出術を行った。その後現在まで再発はみられない(写真2)。

摘出物所見：腫瘍は約20×20 mm 大の球状乳白色、

名古屋市立大学病院歯科口腔外科(主任：井上靖彦部長)

Department of Dentistry and Oral Surgery, Nagoya City University Hospital (Chief: Dr. Yasuhiko Inoue)

受付日：昭和56年5月8日

充実性であった(写真3)。

病理組織学的所見：腫瘍は、かなり明らかな境界を示し、角化粘膜下に結合組織間質の増殖があり硝子化がみられる(写真4)。なお腫瘍は内皮細胞、線維芽細胞、多数の毛細血管から構成されている(写真5)。その強拡大では細隙を囲む内皮細胞と管腔間に明るい円形の核を有する組織球様細胞がみられる(写真6)。また鉄染色陽性のヘモジデリンを認める部位もある(写真7)。

病理組織学的診断：硬化性血管腫(Sclerosing hemangioma)と診断された。

写真1 術前の腫瘍

写真2 術後の創部

写真 3 摘出物

写真 5 腫瘍は内皮細胞，線維芽細胞および多数の毛細血管よりなっている（H-E 染色，弱拡大）

写真 7 腫瘍内に鉄染色陽性のヘモジデリンを認める（H-E 染色，強拡大）

考 察

血管腫は血管組織よりなる腫瘍で，一般に組織の發育異常（過誤腫）であることが多く，また脈管の反応性過

写真 4 角化粘膜下に結合組織間質の増殖があり硝子化がみられる（H-E 染色，弱拡大）

写真 6 細隙を囲む内皮細胞と管腔間に明るい円形の核を有する組織球様細胞がみられる（H-E 染色，強拡大）

形成あるいは単なる拡張で，臨床的に血管腫状を呈するものもある²⁾。Colby ら³⁾は血管腫を組織学的に Capillary, Cavernous, Sclerosing type に分類している。

硬化性血管腫は1943年，Gross と Wolbach⁴⁾が67例の本腫瘍を初めて報告し，体表の種々の部位に出現し，それらの2/3は四肢に現れたと述べている。本症例は頬粘膜に現れた。

なお本邦における口腔領域の硬化性血管腫の報告は少なく著者らの調べた過去10年間の報告例は出崎ら⁵⁾の，76歳男性で右側頬粘膜の血管腫を10年間放置し，漸次増大して硬く，表面が軽度の凹凸のある20mm大の有茎状の硬化性血管腫を生じた報告をみるのみであった。

臨床的には、硬化性血管腫の組織学的変化は長年月を要すると推定され、典型例は他の血管腫に比べて老年者に多いとされている^{4,6)}。

本症例は26歳であり、その発生の起源は患者の自覚する以前にさかのぼると推察される。

病理組織学的には、内皮細胞や結合組織間質が増殖をきたし、その結果、間質が病巣を支配し、緻密な硝子質様にみえ、粘膜下組織をも包含する傾向にあるものをいう¹⁾。本症例は典型的硬化性血管腫の像をしめした。なおヘモジデリンを認めたが、異物巨細胞、リポイドの沈着はみられなかった。

硬化性血管腫は臨床的に鑑別することはむずかし⁶⁾、妊婦の血管肉芽腫⁷⁾、化膿性肉芽腫^{3,11)}、神経線維腫、平滑筋腫⁸⁾との鑑別を要するとされている。粘膜部に生じた単純性血管腫はしばしば二次的炎症を合併し化膿性肉芽腫との鑑別は困難になる²⁾。また皮フ線維腫や組織球腫と同様なものとも考えるものもある⁶⁾。本症例は組織像から硬化性血管腫と診断された。

血管腫の硬化について Gross と Wolbach⁴⁾は、一種の退行性病変で、局所的障害、二次的感染、外傷などの弱い反復性刺激により促進され、病巣は同心円状に線維芽細胞が配列し、線維形成が血管を圧迫し血管腔はしだいに退縮する。またヘモジデリン、類脂肪の堆積が起こり脈管の閉塞が起こった後、残存内皮細胞部は破壊されるという硬化過程を説明している。しかし Carstens と Schrod⁹⁾は光顕所見では Cross と Wolbach⁴⁾、Dawson⁸⁾の述べている組織像と同様であり、硬化の原因は事実上、外傷を否定できないが、血管の破壊によるものかどうかはいまだ不明であると述べている。松村ら¹⁰⁾は、血管腫に組織硬化剤局所注射後の組織像に線維成分に富む Sclerosing type を生じたと報告している。Thoma¹¹⁾は血管腫に炎症性、外傷性の要因が加われれば、腫瘍は漸次増大の傾向を示すと述べている。これらの報告はいずれも慢性局所的刺激が硬化の要因であることを示唆しており、著者らの症例においても頬粘膜の咬傷癖という刺激が硬化と増大を促したのではないかと推察される。

血管腫の治療については、種々な方法が行われているが本症例は容易に外科的摘出術が行われ、また現在まで再発をみない。

結 語

著者らは、26歳の女性に、左側頬粘膜部の硬化性血管腫の1例を経験したので報告した。

引 用 文 献

- 1) McCarthy, P.L., Shklar, G. (前田栄一訳): 口腔粘膜疾患の診断と治療. 医歯薬出版, 東京, 1973, 367頁.
- 2) 石川梧朗, 秋吉正豊: 口腔病理学Ⅱ. 永末書店, 京都, 1969, 988頁.
- 3) Colby, R.A., et al.: Color atlas of oral pathology. ed 3, Lippincott Co, Philadelphia, 1971, p 144.
- 4) Gross, R.E., Wolbach, S.B.: Sclerosing hemangiomas. Am J Pathol 19: 533 1943.
- 5) 出崎喜充, 他: 頬部の硬化性血管腫の1症例. 広島歯誌 3: 41 1975.
- 6) Robbins, S.L.: Pathologic basis of disease. Saunders Co, Philadelphia, 1974, p 629.
- 7) Friedlander, A.H., et al.: Sclerosing hemangioma of the tongue. J Oral Surg 33: 212 1975.
- 8) Dawson, E.K.: Sclerosing angiomas. Edinb Med J 55: 655 1948.
- 9) Carstens, P.H.B., Schrod, G.R.: Ultrastructure of sclerosing hemangioma. Am J Pathol 77: 377 1974.
- 10) 松村智弘, 他: 血管腫患者の統計的観察. 口科誌 22: 476 1973.
- 11) Gorlin, R.J., Goldman, H.M.: Thoma's Oral Pathology II. ed 6, Mosby Co, St Louis, 1970, p 881.